名桜大学紀要，(23)：43-49（2018）

【研究ノート】

スタンドアップパドルボード（SUP）の実施環境，活動満足度，行動意図の関連性について

A study of the relationship between the Stand Up Paddle Board (SUP) environment, participants' satisfaction, and behavioral intentions

平　野　貴　也

要旨

本研究の目的はスタンドアップパドルボード（SUP）実施者の環境に対する評価を明らかにし，活動満足度，行動意図の関連性を明らかにすることである。2016年に開催された日本スタンドアップパドルボード協会（SUPA）公認のイベントに参加した236名に調査を実施した。その結果，SUP実施者の実施環境は２つの因子（継続環境，導入環境）によって構成されており，実施環境に対する評価が高まることで実施者の活動満足度が有意に向上した。さらに実施者の活動満足度は行動意図に有意な影響を及ぼしていることがわかった。

キーワード：スタンドアップパドルボード（SUP），実施環境，活動満足度，行動意図

Ⅰ．はじめに

１．レジャー・スポーツの普及について

明治期以降，乗馬，野球，テニス，ボート，ゴルフ，スキーなど，欧米起源のレジャー・スポーツやレクリエーションが我が国に導入されてきた。国内に定着した時期や場所は，種目によって異なり，普及する過程には用具の供給，実施場所，学校組織への導入，軍隊の関与，受容基盤，社会的背景などによる影響がみられた。

マリンレジャー・スポーツにおいて，ヨットは1920年代に華族などの上流階級が受容基盤となり，外国人居留地から高原避暑地に伝播し，海浜別荘地を中心に広まった。また日本経済が発展し，経済的に豊かになったという社会的背景が普及に関連していた（佐藤，2003）。サーフィンは，1960年代に参加者が増加し，湘南地区から全国に伝播した。用具の供給と活動場所の整備が参加者の増加に影響を与えており，サーフファッションの流行やマスコミによるプロモーションが普及を促進した（小長谷，2005）。ウインドサーフィンは1974年に国内で用具の販売が開始され，普及初期には競技団体の普及活動及び組織づくりが普及を促進した。さらに製品イノベーションの連続，用具の供給，国際競技会への採用などが普及に影響を及ぼしていた（平野；2001，2004）。Mullin（2007）はスポーツ消費者が個人的および環境的要因の影響を受けながら，情緒的関与，認識的関与，行動的関与を強めていくことを述べているが，同様にマリンレジャー・スポーツにおいても用具供給や活動場所などの環境的要因による普及への影響が見られた。そのため実施者を増加させ，関与を強めていくためには実施環境を整備する必要がある。マーケティング，サービスクオリティー分野の研究では，利用者の施設，設備などに対する評価が，満足度，推奨意図及び継続意図を高めることに関する研究が蓄積されている（Murray and Howat；2002, Howat, at al.；2002,秋吉；2013）。

これまで新しいスポーツが国内に普及する段階におけるスポーツの実施環境に対する満足度と実施者の行動意図に対する検討はなされていないが，レジャー・スポーツを国内に普及・振興させていく行為をサービスと捉えるならば，新しいスポーツに参加する実施者の環境を整備することはサービスクオリティーを高めることであり，実施環境に対する活動満足度が行動意図に影響すると推察される。本研究のテーマであるスタンドアップパドルボード（以下SUPと表記する）は，近年，実施者が増加しているマリンレジャー・スポーツであるが，国

内への普及，定着を考える上で実施環境を整備する必要がある。

２．スタンドアップパドルボードについて

SUPは，水上でボードの上に立ち，シングルブレードのパドル(水を漕ぐ櫂が一つ)を漕いで進むレクリエーションで，スタンドアップパドルボーディング，スタンドアップパドルサーフィンなどと呼称されている。

活動内容は，一斉にスタートして決められコースを回り，順位を競う「レース」，島と島を横断する速さを競う「チャンネルクロッシング」，波に乗る技術を競う「SUPサーフィン」，SUPを漕ぎながら釣りをする「SUPフィッシング」，ボードの上で運動を行う「SUPフィットネス」「SUPヨガ」，川を下る「リバーSUP」，漕ぎながら沖に出たり，景色を見たりする「クルージング」など競技やレクリエーションとして，多様なフィールドに広がりを見せている。

船やボードの上に立ってパドルやオールを漕いで進む行為は以前から行われており，SUPの起源はハワイのビーチボーイやペルーのトトラ船，サーファーの遊びや大型船への通船の発展など，諸説が有る。誰でも取り組めるレクリエーションとなったのは，製品イノベーションによって，バランスが良く，立って動作することを前提とした専用の用具が開発されたことに他ならない。サーフィンやウインドサーフィンなどと比較して手軽で，初心者でもすぐに立って漕げるようになることも特徴である（平野，2015）。

2005年頃に用具の輸入が始まり，2006年には神奈川県で本格的なSUP競技会が開催された。実施者の増加に伴い，2012年に社団法人日本スタンドアップパドルボード協会（以下SUPAと表記する）が設立され，第１回全日本SUP選手権が静岡県で開催された。2012年に約80名であったSUPA会員数は2016年には約800名以上に増加し，インストラクター制度や技能検定が整備された。また2017年には国内で300以上の競技会，講習会，イベントが開催されており，急速に普及している。平野(2015)はSUPの普及が初期段階にあり，普及を促進するためは安全対策，ルールの周知，指導者の育成，他の競技団体との関係調整などの環境整備を指摘しているが，実施者の実施環境に対する評価については明らかにしていない。

Ⅱ．目的

本研究はSUP実施者が現状の実施環境をどのように評価しているのかを明らかにする。そして実施環境に対する評価と活動満足度，行動意図の関連性を明確にすることを目的とする。

Ⅲ．方法

１．調査対象と調査方法

本研究は2016年に開催されたSUPA公認の４イベント（レース，講習会，試乗会などで構成）に参加した実施者に調査用紙を配布し，その場で回収を行った。500票配布し，有効回収数は283票，有効回収率は69％であった。

２．調査項目

調査項目は個人的属性６項目，実施環境10項目（活動状況，開始時の状況，情報の入手），活動満足度１項目，行動意図２項目を用いた。

１）実施環境

SUPの実施環境についてSUP販売メーカー３社に対し，「SUPが国内に普及するために影響を及ぼす実施環境」と題してインタビュー調査を行った。得られた結果をレジャー・スポーツに関する研究を行っている研究者３名（スポーツ心理学，スポーツ社会学，海洋スポーツを専門とする研究協力者）によって用具，競技，活動場所，指導・安全，情報・促進活動の５つの観点によって集約し，10の質問項目を作成した。尺度は，リッカートタイプの５段階尺度（５：整っている～１：整っていない）を用い，等間隔尺度を構成するものと仮定し，５点から１点の得点を与えた。

２）活動満足度

実施者の活動満足度は，「SUPの実施に伴う総合的な満足の度合い」と定義した。質問項目は，あなたは総合的に考えるとSUPを行う活動にどのくらい満足していますか？の１項目を設定し，リッカートタイプの５段階尺度（５：とても満足～１：とても不満）を用い，等間隔尺度を構成するものと仮定し，５点から１点の得点を与えた。

３）行動意図

行動意図には推奨意図と継続意図の２変数を用いた。行動意図は合理的行為理論（Theory of Reasoned Action）や計画的行動理論（Theory of Planned Behavior）において，将来の行動を予測することが実証されており，スポーツ行動にも適応可能であることが実証されている（徳永ら1980）。

推奨意図は「あなたは他の人にSUPを始めるように勧めようと思いますか？」，継続意図は「あなたはやむをえない理由がない限りSUPの活動を継続したいと思いますか？」のそれぞれ１項目を設定し，尺度はどちらもリカートタイプの５段階尺度を設定し，等間隔尺度を構成するものと仮定した。

３．仮説の設定（図1）

仮説①　SUPの実施環境に対する評価は活動の満足度に影響を及ぼす

仮説②　実施者の活動満足度は推奨意図に影響を及ぼす

仮説③　実施者の活動満足度は継続意図に影響を及ぼす

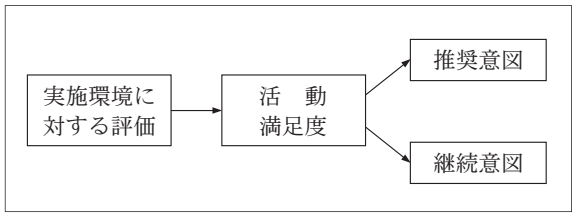


図１．実施環境評価と活動満足度による行動意図の仮説モデル

４．分析方法

活動者の満足度の規定要因を探るため，実施環境に対する評価項目において探索的因子分析を行った。探索的因子分析によって抽出された実施環境評価因子，活動満足度，推奨意図，継続意図について相関分析を行った。そして実施環境評価因子を独立変数として，活動満足度を従属変数に設定し，重回帰分析を行った。また活動満足度を独立変数に，推奨意図，継続意図を従属変数に設定し単回帰分析を行った。分析にはIBM SPSS 22.0 for Windowsを用いた。

５．倫理的配慮

SUPAに対する調査依頼の際に，調査主旨，調査方法，調査内容，倫理的配慮について説明を行い，同意を得た。調査への協力は自由意志であること，回答しなくても不利益は生じないこと，データは個人が特定されることがないように処理すること，データの管理は厳重に行うことを調査用紙に明記した。さらに調査の実施に際しては，調査者が事前に口頭で説明を行い，回答を持って同意したとみなした。

Ⅳ．結果及び考察

１．属性

表１より，対象者の属性は男性80.5％（190名）女性19.5％（46名）であった。SUPA会員の男女構成比は4:1であり，ほぼ同様の構成となった。年代は30代が34.3％，40代が32.2％と多く，平均年齢は40.86±10.92歳であった。職業は会社員が43.6％（106名），自営業が32.2％（76名）であった。

表１．属性と活動状況

性別	N	%
男性	190	80.5
女性	46	19.5
年代	**N**	**%**
10代	4	1.8
20代	26	11.1
30代	81	34.3
40代	76	32.2
50代	41	17.4
60代	7	3.2
居住地	**N**	**%**
東北・北海道	24	10.2
関東	67	28.4
中部	64	27.1
関西	24	10.2
中国・四国	27	11.4
九州・沖縄	30	12.7
職業	**N**	**%**
会社員	103	43.6
公務員	18	7.6
自営業	76	32.2
パート	11	4.7
専業主婦	2	.8
学生	12	5.1
小中高校	2	.8
無職	3	1.4
その他	9	3.8

技能レベル<自己申告>	N	%
初級者	89	37.7
中級者	90	38.1
上級者	57	24.2
活動内容	**N**	**%**
レース志向	46	19.5
サーフィン志向	110	46.6
フィットネス志向	80	33.9
活動回数	**N**	**%**
週１回未満	29	12.3
週１回	85	36.0
週２～３回	88	37.3
週４回以上	34	14.4
遠征の回数	**N**	**%**
行っていない	101	42.8
年２回程度	70	29.7
年５回以上	65	27.5
定期的なスポーツ活動（過去実施分も含む）	**N**	**%**
サーフィン	139	58.9
ウインドサーフィン	91	34.3
ウエイクボード	25	10.6
カヌー・シーカヤック	22	9.3
スクーバダイビング	22	9.3
ＰＷＣ	21	8.9
ライフセービング	16	6.8

(n=236)

主な活動の内容は，サーフィン志向が46.6％（110名）と最も多く，次いでフィットネス志向33.9％（80名）であった。フィットネス志向にはSUPヨガ，SUPフィットネス，健康づくり，体力増強などを目的とする活動者が含まれる．活動頻度は週に２回から３回実施する者が37.3％（88名），週１回が36％（85名）であった。また継続的にSUPを実施するようになった年数は１年から13年に分布しており，平均3.85±2.08年であった。なお57.2％（135名）の者が１年に２回以上の遠征（ホームゲレンデ以外で活動する）を行っていた。平野（2014）はSUP実施者が多様なマリンスポーツからの転向もしくは並行して実施していると述べており，過去または現在において継続的に実施しているマリンスポーツ活動について調査を行った。その結果，サーフィン58.9％（139名），ウインドサーフィン34.3％（91名）など多様なレジャー・スポーツ種目を経験している者がSUPを実施していることがわかった。

２．実施環境に対する評価（表２参照）

まず実施環境に対する項目の得点平均は「ゲレンデの活動場所の使いやすさ」3.63，「用具の保管・運搬の利便性」3.58の得点が高く，「用具の価格・耐久性」3.04，「技術向上につながる練習法・指導法の確立」3.02の得点が低かった。用具についてはより価格が低く，耐久性の高

表２．実施環境に対する評価の因子構造

因子名	項　目	Mean	SD	Ⅰ	Ⅱ	共通性	α
継続環境	サーファーや海浜利用者との関係性	3.23	.989	.725	-.031	.498	.80
	技術向上につながる練習法・指導法の確立	3.02	1.033	.685	.039	.505	
	用具の価格や耐久性	3.04	1.014	.649	-.136	.329	
	適正な競技運営やルールの運用	3.22	1.015	.593	.124	.461	
	ゲレンデや活動場所の使いやすさ	3.63	1.017	.542	.125	.394	
	用具の保管・運搬の利便性	3.58	1.099	.465	-.039	.194	
導入環境	競技会への参加しやすさ，わかりやすさ	3.16	.730	-.128	.933	.735	.83
	水上での安全対策・用具の安全性	3.19	.876	-.116	.790	.522	
	競技会やイベントの情報提供・告知	3.44	.826	.189	.604	.544	
	用具の使用法や練習法に関する情報提供・周知	3.23	.950	.256	.533	.522	

いものが求められており，製造販売メーカーの協力が必要である。また練習法・指導法の確立については競技団体，指導者団体による教則本の作成や指導法講習会などの開催が求められていると考えられる。またこれらの尺度を使用した研究が他に見られないため，SUPの特徴なのか，本研究の対象者の特徴なのか定かではないが，10項目の活動満足度得点の平均が3.02から3.63に分布しており，全体的に低い数値であった。実施環境全体の満足度を高める必要があるのではないかと推測された。

次に実施環境に対する評価10項目について探索的因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用い，固有値１以上の基準を設け，プロマックス回転を行った。その結果２因子が抽出された。第１因子は「サーファーや海浜利用者との関係性」や「技術向上につながる練習法・指導法の確立」「用具の価格や耐久性」などすでにSUPを行っている者が活動を継続していくうえでの環境が主であるため「継続環境」因子と命名した。また第２因子は「競技会への参加しやすさ，わかりやすさ」や「水上での安全対策・用具の安全性」「競技会やイベントの情報提供・告知」などこれからSUPの活動を始める者や始めだした者が取り組みやすくなる項目の内容であることから「導入環境」因子と命名した。内的整合性を確認するためにCronbachのα係数を算出したところ，継続環境因子.80，導入環境因子.83であり，一定以上の信頼性が確認された。

３．実施環境に対する評価，活動満足度，行動意図の関連性

抽出された継続環境因子，導入環境因子の２因子，活動満足度（Mean＝3.94,SD＝0.691）と行動意図を示す推奨意図（Mean＝4.41,SD＝0.675），継続意図（Mean＝4.56,SD＝0.592）において相関分析を行った。その結果，実施環境に対する評価の２因子と活動満足度に有意な相関が見られた（表３参照）。

そのため２因子を独立変数に活動満足度を従属変数に設定してステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果，「継続環境」「導入環境」に２因子と活動満足度に有意な影響を与えていることが明らかになった。決定係数は.196であり，この２因子で活動満足度の約２割を説明している。

次に活動満足度が及ぼす影響を明らかにするため，活動満足度，推奨意図，継続意図の変数間において相関分析を行った。その結果，活動満足度と推奨意図，活動満足度と継続意図の間には有意な相関係数があることが明らかになった。そのため，活動満足度を独立変数に，推奨意図と継続意図を従属変数にそれぞれについて単回帰分析を行った結果，活動満足度は推奨意図と継続意図に対し，どちらも有意な関連性を示した（p<.001）。これらのことから，活動に満足している者は他の人にSUP活動を進め，自らの活動も継続する意図が強くなることが明らかになった。

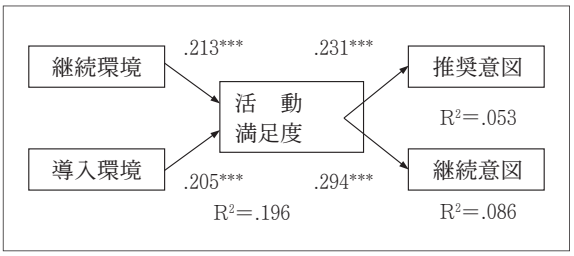
表 3. 実施環境に対する評価，活動満足度，行動意図の相関

	継続環境因子	導入環境因子	活動満足度	推奨意図	継続意図
継続環境因子		.558**	.324**	.067*	.079*
導入環境因子			.328**	-.031	.070*
活動満足度				.231**	.294**
推奨意図					.573**

**p< .01

４．仮説モデルの検証

図２は仮説モデルの検証結果を示している。仮説①「SUPの実施環境に対する評価は実施者の満足度に影響を及ぼす」については実施環境を評価する10項目を因子分析し，抽出された２因子が活動満足度に有意に影響を及ぼしていたことから，仮説①は支持された。仮説②「実施者の活動満足度は推奨意図に影響を及ぼす」及び仮説③「実施者の活動満足度は継続意図に影響を及ぼす」については単回帰分析を行った結果，両変数とも有意な関連性が見られたため，仮説②仮説③は支持された。一方で実施環境因子と行動意図には直接的な相関関係がみられなかった。ただ実施環境因子，行動意図ともに活動満足度との相関は見られ，活動満足度を介することで相互に影響を及ぼしていることが推測された。つまり競技団体や販売メーカーが中心となって形作っているSUPの実施環境が整えば整うほど実施者は満足する。さらに実施者の満足が高まることで他の人にSUPを薦め，自らもSUPを継続しようとする意図が強くなることが明らかになった。



*** p<.001

図２．仮説モデルの検証

SUPはウインドサーフィンやスクーバダイビングなどのマリンスポーツと比較すると，簡単に体験できる反面，テニスやスキーなど他のレジャー・スポーツと比較すると用具が高価で，水辺に出かける必要があり，水に濡れるという不便さがある。それらの環境を整備し，活動満足度を高めることが行動意図を高めることにつながるであろう。現時点ではすでにマリンレジャー・スポーツを実施している者がSUPに多く参加しているが，マリンレジャー・スポーツの不便さ，煩わしさを軽減する環境整備を行うことで，これまでマリンレジャー・スポーツを実施していなかった者の満足度が向上し，継続へとつながると考えられる。

またレジャー・スポーツの普及にとって安全性の確保は必須条件である。手軽に実施できることはSUPにとってメリットではあるが，充分に技能を習得していない者が沖合いに出る危険性もあり，安全面の環境整備，スクールなどの技能習得環境の整備，指導者養成などの教育環境の整備が活動満足度を高め，継続意図及び推奨意図を高め，参加者の普及，定着につながると考えられる。

Ⅴ．まとめ

本研究はSUPへの実施者が用具の供給や活動場所などの現在の実施環境をどのように評価しているのかを明らかし，実施環境に対する評価，活動満足度，行動意図との関連性を明確にすることを目的であった。活動満足度は全体的に低く，特に「用具の価格・耐久性」「技術向上につながる練習法・指導法の確立」には改善する必要があった。

実施環境に対する評価が高まることによって実施者の活動満足度が向上し，さらに実施者の活動満足度が向上することによって行動意図が向上する。つまりSUPを継続しようとする者が増え，SUPを他者に勧めようとする者が増えることがわかった。

Ⅵ．今後の課題

本研究では競技団体関係者及び用具販売メーカーのスタッフに聞き取り調査を行うことで実施環境を評価する指標を作成した。しかし，幅広い概念を10項目で網羅するには限界があった。実施環境を限定し，調査を行うか，尺度を増やす必要がある。また実施環境を評価する継続環境因子，導入環境因子の２因子によって活動満足度の約２割程度しか説明できておらず，さらに多くの要因を加味することでより説明力の高い指標づくりを行う必要がある。加えて，本研究の対象には経験年数や活動内容に違いが見られており，実施環境に対する評価及び活動満足度にこれらによる影響があったことも推測される。対象者の選定を含め，今後の課題としたい。

文献

１）秋吉遼子・山口泰雄（2013）公共スポーツ施設におけるサービス・クオリティ，利用者満足，及び行動意図の関連性に関する実証的研究．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，6(2). pp.1-10.
２）平野貴也（2001）我が国におけるウインドサーフィンの特許とオリンピックへの導入に関する研究．日本スポーツ産業学研究，11(2). pp.23-38.
３）平野貴也（2004）黎明期におけるウインドサーフィンの普及に関する研究－日本ウインドサーフィン協会の活動を中心に－．レジャー・レクリエーション研究，52. pp.11-22.
４）平野貴也(2015)スタンドアップパドルボード(SUP)愛好者の実状と普及のための課題．日本海洋人間学会，4(1). pp.41-46.
５）Howat,G.Crilley, G.Mikilewicz, S.Edgecombe,

S.March, H.Murray, D.Bell, B.(2002) Service quality, customer satisfaction and behavioural intentions of Australian aquatic centre customers, 1999-2001.:Annals of Leisure Research, 5. pp.51-64.

6）河合辰巳：アメリカにおけるスタンドアップパドルの発展と普及に関する研究．2013年度早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文，2013.

7）小長谷悠紀（2005）日本におけるサーフィンの受容過程．立教大学観光学部紀要，7. pp.1-16.

8）Mullin, B. Hardy, S., Sutton, W.(2007) Sport marketing. 3nd ed. : Human Kinetics.

9）Murray, D. and Howat, G.(2002) The Relationships among Service Quality, Value, Satisfaction, and Future Intentions of Customers at an Australian Sports and Leisure Centre.Sport Management Review, 5(1). pp.25-43.

10）佐藤大祐（2003）明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤．地理学評論，76（8）. pp.599-615.

11）弓田恵里香・原田宗彦（2015）スポーツイベント参加者のデスティネーションイメージが評価，満足度，行動意図に及ぼす影響．観光研究，27（1）. pp.101-113.

A study of the relationship between the Stand Up Paddle Board (SUP) environment, participants' satisfaction, and behavioral intentions

HIRANO Takaya

ABSTRACT

In recent years, the number of the participants in Stand Up Paddle Board (SUP) has been increasing in Japan. The purpose of this study is to clarify the currents situation and the relationship between the SUP environment, participants' satisfaction, and behavioral intentions. The data was collected from 236 SUP participants who took part in official SUPA events in 2016. The results indicate that participants' environment is derived from two factors:beginning environment and continuing environment. In addition, the participants' environment showed a statistically significant effect on participants' satisfaction. Furthermore, participants' satisfaction also showed a significant influence on behavioral intentions such as participating in SUP again and recommending SUP in the future.

Keywords: Stand up paddle board (SUP), environment, participant satisfaction, behavioral intentions